



関越 支社篇

湯けむりながら 寄り添いながら

人々の営みを支える恵みの泉 「野沢温泉」

全国に数ある温泉地のなかでも、他に類を見ない独自の文化を受け継いできた野沢温泉。長野市から北へ50kmほどの場所にあるこの温泉村には13の外湯があり、それらは江戸時代から「湯仲間」という制度により村人の共有財産とされてきた。つまり、野沢温泉の外湯は村人にとって、わが家の風呂なのである。そして、ここには、季節を問わず国内外から数多くの観光客が訪れる。なかでも多いのがオーストラリアからの来訪者。その理由を、一般社団法人野沢温泉観光協会の森博美事務局長に伺った。「野沢温泉村ではスキーヤーが減少する中、十数年前からオーストラリアへのプロモーション活動を行ってきました。当初は旅行代理店などを訪問するところから始め、少しずつ認知されるようになり、現在ではスキーシーズン中に訪れる外国人観光客の約6割がオーストラリアの方々となっています」。野沢温泉村には24時間営業のコンビニエンスストアもなければ、クレジットカードが使えない宿や飲食店もあります。そもそも、宿は



一般社団法人野沢温泉観光協会の森博美事務局長

江戸時代より続く伝統工芸
あけび蔓細工

あけび蔓は奥信濃の標高5000mから8000mの山地に自生するアケビ科の落葉つる植物。弾力性に富み丈夫であるため、江戸時代から背負い籠や花籠といった日用品、さらには郷土玩具の鳩車を作る材料として重用されてきた。昭和59年には長野県伝統的工芸品にも指定されている。村内に現存する6つの工房、そのひとつが三久工芸だ。代表の久保田敏昭さんにお話を伺った。「あけび蔓細工には表皮をつけたまま編む「赤棒」と、表皮を剥いだ「製白蔓」の2種類があり、以前は手触りがよく使い込むほどに味が出る製白蔓のほうが主流でした。しかし、現在は自然で素朴な風合いの赤棒に人気が集まっています。また、昔は生活に用いる大きめのカゴなどが人気でしたが、最近はインテリア向きの小さくてかわいい製品がよく売れていますね」。製白蔓にするための表皮を剥く作業に慣れていないのが野沢温泉村の麻釜。久保田さんは毎朝ここへ足を運び、30分ほどあけび蔓を湯がく。こうすることで蔓が柔らかくなり、虫も付きにくくなるという。大切に言えば30〜40年は持つというあけび蔓細工。その造りのよさと手作りならではの豊かな味わいがいま再び注目されている。三久工芸では注文生産が追いつかない状態が続くが、それに拍車をかけているの



三久工芸の代表、久保田敏昭さん。かつてその作品が経済産業大臣より表彰されたことも

が深刻な材料不足だ。「質の高いあけび蔓は雪深いところで採れるのですが、近年は降雪量が半減しているうえ、人手不足から山の手入れも難しいため材料の確保が難しくなっています。県内の職人のなかでは68歳の私が一番の若手（笑）。長野のあけび蔓細工が10年、20年先と続いてくればいいのですが」。そう言って視線を落とす久保田さん。しかし、職人魂はまだまだ健在だ。「今でも時代のニーズに応じた新しい製品を作れないかと日々模索しています。若いころは新しいアイデアがポンポン出てきたのに、トシのせい最近はそのようなものがなくて（笑）。この熱い情熱が、志ある若者に受け継がれることを願ってやまない」。



大正時代に編まれた壺。当時の精巧な技術はすでに失伝しているという



工房にほど近い「蔵の店」。あけび蔓細工を始め多彩な工芸品を販売する



毎朝あけび蔓を麻釜で湯がくのが久保田さんの日課



野沢温泉村の暮らしに根付き、人々の生活を支える麻釜



野沢温泉のシンボルとも言える「大湯」。美しい湯屋建築に目を奪われる



鉄道ファンにはたまらない
懐かしの鉄道車両がズラリ!



関越支社の島川秀人(左)と
川上敬輔(右)がご案内します!

ビルシステム部 昇降機課

我が街の ご当地自慢

鉄道の歴史を一堂に！ 鉄道博物館

鉄道博物館様とは、僕らが入社する前からの付き合い合いになります。秋葉原からさいたま市へ移転し、名前も「交通博物館」から「鉄道博物館」になった2007年、三菱電機は施設のすべての昇降機(エレベーター6台・エスカレーター4台)を納入させていただきました。そして2018年7月、全館リニューアルの集大成として新館がオープンした鉄道博物館。その見どころを僕らが紹介したいと思います!

イチオシ地元グルメ

鉄道博物館からほど近い国道17号線沿いにある「レストラン葡萄酒(ワイン)」さん。昔ながらの洋食屋さんとして地元では有名なお店で、うちの会社にも毎日のようにお弁当を届けてくれます。僕らがよくおすすめなのがカレー。一度食べたらずみつきになる美味しさです!

洋食屋さんだけに
トッピングも抜群!



**特注仕様で
ご要望にお応えした
新館エレベーター**

三菱電機は新館のエレベーターを新たに納入しました。僕らも設計から入までの一部始終を間近で見ましたが、設計段階で大変だったのは、大型展示物も乗せられる仕様になければいけないことでした。展示物のなかには数メートルにおよぶものもあるため、設計部門に協力してもらいながらの特注仕様となりました。また、デザインも建物の雰囲気に合わせて何通りも検討し、建物に変更があればその都度サンプルを作って再検討という作業を繰り返しました。お客様の要望をしっかりと叶えた関越支社の先輩方は、やっぱりすごいと改めて尊敬します。エレベーターやエスカレーターは普段様々な人が使う乗り物であり、営業としてその販売に携わることは「少しでも誰かの助けになっているのかな」と感じることもあります。また、お客様の要望を満たすだけでなく、こちらから提案させていただく機会も多々あります。そのときにお客様が求めている以上の昇降機を提案できるように、これからもお客様や利用者のために頑張っていきたいと思えます。



写真は乗用エレベーター

三菱電機関越支社

グループ各社と連携し、お客様へより良い提案を。

さいたま新都心のほか、新潟・長野・群馬各県に営業拠点を置き、お客様の窓口として営業しております。取扱品目は、水環境システム等の社会インフラ、エレベーター・エスカレーター・セキュリティシステム等のビルシステム、そしてFA機器・配電制御機器を中心に、新潟支店では鉄道車両用電機品も取り扱っております。また、エリア内のグループ各社との連携活動も積極的に展開しており、その他の製品のお問い合わせも承っております。

埼玉県さいたま市中央区新都心11-2 TEL 048-600-5700
(明治安田生命さいたま新都心ビル34F)

- | | | | | |
|--|---|--|--|---|
| <p>野沢温泉観光協会
長野県下高井郡野沢温泉村豊郷9780-4
TEL 0269-85-3155</p> | <p>三久工芸
長野県下高井郡野沢温泉村河原湯
TEL 0269-85-2178</p> | <p>善光寺事務局
長野県長野市大字長野元善町491-1
TEL 026-234-3591</p> | <p>岩松院
長野県上高井郡小布施町雁田
TEL 026-247-5504</p> | <p>鉄道博物館
埼玉県さいたま市大宮区大成町3-47
TEL 048-651-0088</p> |
|--|---|--|--|---|



日本最古といわれる 仏像を祀る国宝・本堂 「善光寺」

創建以来約1400年の歴史を刻む日本を代表する寺のひとつ。

御本尊の光三尊阿彌陀如来様はインドから朝鮮半島百濟国へと渡り、欽明天皇13(552)年に日本へ伝えられた日本最古の仏像といわれている。国宝に指定されている現在の本堂は、江戸時代の宝永4(1707)年に5年の歳月を経て完成した。木造建築としては国内屈指の規模を誇り、撞木造りという独特な建築様式が用いられている。平成10(1998)年に開催された長野冬季オリンピックの開会式では善光寺梵鐘が世界平和の願いを込めて全世界に向けて響き渡り、世界中から集まった人々が参道を埋め尽くしたのを記憶している人もいるだろう。善光寺を参拝した時には、ぜひひとも体験したい「お戒壇巡り」。瑠璃壇下の真鍮暗な回廊を手探りで進み、御本尊様の真下に懸かる「極楽のお錠前」に触れることができれば極楽浄土が約束されるといわれ、大型連休中などは行列ができることも。実際に体験すると想像以上の



お戒壇巡り入口

間に戸惑う参拝者も多い。右手を腰の高さに据えて壁を伝いながら進むと、徐々に視界から光が消えやがて文字通りの真暗闇に。出口が近づきわずかな光を見たとき、善光寺は感じることに、光のありがたさ、目の見える尊さを深く感じることであり、もうひとつ体験しておくべきは、経蔵での輪藏回し。善光寺の経蔵は宝暦9(1759)年に建立された宝形造りのお堂で、その中央には八角の輪藏がある。内部には仏教経典を網羅した「切経」が収められており、輪藏に付属している腕木を押し回すことで、切経をすべて読んだことと同じ功德が得られるといわれている。また、参拝者への配慮にも余念がない。善光寺ではかねてからお年寄りや足の不自由な人でも参拝しやすいようスロープの導入を検討されていたものの、国宝であるがゆえに歴史的文化的保護の観点から規制がかかっており、申請しても「現状維持」という回答が返ってきた。契機となったのは1998年の長野五輪。長野市全体でバリアフリー化が進むなか、本堂本体にはまったく手を加えずに仮設建造物の形をとることでスロープの設置に成功した。実物を見ることと本堂と見事に一体化しており、まったく違和感はない。さて、善光寺を満喫したら、食事にもこだわりたい。信州の旬の食材を活かした精進料理をもてなすのが、参道沿いの宿坊「兄弟坊(このんぼう)」。目で楽しみ、味で癒される精進料理は新鮮でありながらも、どこか懐かしい味わい。ぜひ、旅の思い出の1ページに加えていただきたい。



写真上:本堂東側に架設されたスロープ 写真下:目にも鮮やかな兄弟坊の精進料理

八方睨みの鳳凰に 出会える寺 「岩松院」

開創は文明4(1472)年、開山は不琢玄珠禪師。雁田城主の荻野備後守常倫が20歳の城壁を造り「岩松」と称したことが由来。本尊は江戸時代初期に作られた宝冠をいたたく釈迦牟尼仏。豊臣秀吉の重臣として知られる戦国武将の福島正則や、江戸時代を代表する浮世絵師の葛飾北斎さらには俳人小林茶ゆかりの古寺でもあり、境内には福島正則の霊廟や「茶がやせ蛙まけるな茶これにあり」という句を詠んだ「蛙合戦の池」がある。なかでも最大の見どころは、本堂中央(大間の天井に描かれている鳳凰図。嘉永元(1848)年、葛飾北斎が88歳から89歳にかけて描いた作品といわれている。八方睨みの鳳凰と称される鋭い目はどこから見てもこちらを見据えているように感じる。大きさは畳21枚分。作成から170年の間に度も塗り替えられていないにもかかわらず、今もなお鮮やかな色彩を保っている。鳳凰図は朱鉛丹・石黄・岩緑青・花紺青・青・藍などの顔料を膠水で溶いた絵具で彩色されており、周囲は胡粉、下地に白土を塗り重ね金箔の砂子が蒔かれている。また、制作時の痕跡として絵皿の跡が残っているものも。北斎は翌年江戸に戻り90歳で往生を遂げていることから、この鳳凰図は北斎の技を尽くした集大成といっても過言ではないだろう。



THE PROJECT

1958年の開業から60周年を迎える東京タワー。長く東京のシンボルとして愛されてきた高さ333mの巨大な鉄塔には、今もなお国内外から年間200万人以上の観光客が訪れている。2018年3月、その人気がさらに高まりそうな新アトラクション『トップデッキツアー』がスタートした。高さ250mの特別展望台をトップデッキと改称し、無数に張り巡らされた鏡と幻想的な光が生み出す近未来的なフロアに。このトップデッキを1階のフットタウンロビーから始まるツアーのクライマックスとして位置付け、超高層タワーならではの体験型展望ツアーを提供する。そんなトップデッキツアーの安全を支えるとともに、さらなる感動を演出するのが新たに開発した三菱電機の屋外展望用エレベーター。前例のないプロジェクトとなった、その開発の裏側に迫る。



「エンターテインメント性と安全性の狭間で」

高さ150mのメインデッキ（旧大展望台）とトップデッキを結ぶ屋外展望用エレベーターのリニューアルは、トップデッキツアーの開始と同時に期に行われた。しかし今回のリニューアルは、決してトップデッキツアーのために行われたものではない。プロジェクトの核は取り役を務めた三菱電機ビルテクノサービスの村越は、開発の起点をこう語る。

「東京タワーの大展望台から特別展望台に至る展望用エレベーターは、開業から一度も根本的なリニューアルを行っていませんでした。これまで数十年に渡りメンテナンスを行ってきたものの、部品の確保が難しくなり、巻上機やレール、かご室の寿命も近づいたことから2011年に全面リニューアルの検討が始まり、2015年から本格的に始動しました。」

東京タワーの建築主である日本電波株式会社からの要望は「安全最優先のエレベーター」であること。「50年、100年後の来塔者にも感動を与えられる東京タワーであり続けるために、これまで以上に安全なエレベーターを設置してほしい」というものだった。しかし、ただ安全なだけでは来塔者に感動を与えないことはできない。展望用エレベーターにふさわしいエンターテインメント性、それを兼ね備えることが村

安全を確保しつつ感動を生むエレベーターに、それが三菱電機に課せられたミッション。

エンターテインメント性と安全性の狭間で

越に課せられたミッションだった。「特別展望台行きエレベーターは来塔者からお金を頂戴してお乗りいただくものですので、東京タワーとしてもエンターテインメント性は不可欠というお考えでした。では、それを表現するにはどうすればいいのか。天井、床、壁をすべてガラス張りにしてはどうか。全面をモニターにして映像を流すことはできないか。またお客様からは『途中で停止させてかご室を揺らし、スリルを味わっていただくような演出はできないか』というような提案をいただきましたが、それらを実現することは困難でした。」

プロジェクトを通じて手にした2つの財産

乗る人に感動を与える仕掛けは求められるが、安全性には1ミリの妥協も許されない。そのハードルをさらに高くしていたのが、東京タワーの展望台用エレベーターが屋外に設置されるという点。

「365日にわたり風雨にさらされるうえ、法律上の問題もクリアしなければなりません。さらには、現役の電波塔であることから電磁波に

乗る人に感動を与える仕掛けは求められるが、安全性には1ミリの妥協も許されない。そのハードルをさらに高くしていたのが、東京タワーの展望台用エレベーターが屋外に設置されるという点。



100年後も感動を与える東京タワーであるために。

三菱電機ビルテクノサービス(株)
昇降機保守事業本部
モダンゼーション生産統括部
村越 信忠

よる電子機器への影響も考慮する必要があります。詳しい説明は開発陣に譲りますが、安全性を脅かす障害が幾重にも重なっていたのです。」

大胆な仕掛けが制限されるなか、いくつかのデザイン案を提案するもなかなかOKが出ない。そこで村越は、デザインのプロ集団である三菱電機デザイン研究所の門を叩いた。彼らは安全性を犠牲にすることなく、大きなガラス窓を設けることで素晴らしい眺望を楽しめるエレベーターをデザイン。まもなく、村越にクライアントからOKの返事が届く。

「今回のプロジェクトを通じて、2つの財産を手に入れることができました。ひとつは自信。どんな難題にも全力で取り組むことで、必ず完遂できるという確信を得ることができました。もうひとつは絆です。これほどまでに開発・設計・デザイン・品質管理・据付工事のあらゆる部門が、垣根を超えて団結したプロジェクトを僕は経験したことがありません。この絆を大切にしながら、これからも『チーム三菱』としてより良い昇降機をお客様へ提案していきたいと思えます。」



THE PROJECT

東京タワー屋外展望用エレベーター
東京のシンボルに、さらなる安心と感動を。

THE PROJECT



壁も床もない昇降路に、新たに非常着床用出入口を。

三菱電機(株) 技術部 エレベーター意匠設計課 羽根田 治

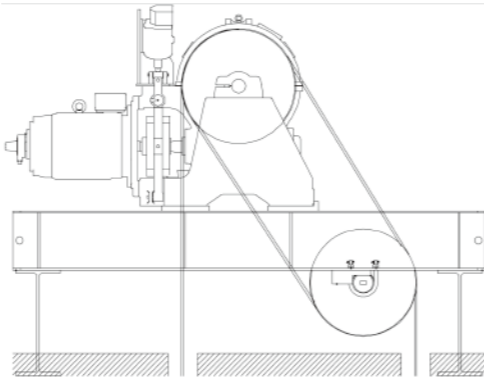


すべてが特殊品であり、相互のフォーローが不可欠。

三菱電機エンジニアリング(株) 稲沢事業所 エレベーター機械技術部 機械設計二課 山下 健二



鎌倉製作所に電気系のシステムを持ち込み、入念な耐電磁波試験を実施



リニューアル後はらせ車を1つとし、ロープの屈曲回数を削減

生し、左右対称でバランスを保つていた塔体の形を変えることになってしまふ。現場で対応した村越さんからは、設計事務所やゼネコンと打ち合わせを重ね、据付方法を数ミリ単位で検証したと聞いています。また、意匠機器においても屋外および電磁波対策は入念に行われた。「あらゆる方向から風雨にさらされるためIP規格に相当する性能を満足するよう防水試験を実施するとともに、出入口扉の試作品に高さ250mの風圧と同等の荷重を加えた剛性試験を実施し屋外対策を行いました。さらに、エアコンは通常であれば天井上に設置するのですが、電磁波の影響を受けやすいため天井内に仕込み、かご室内側からメンテナンスできる構造としています。同様の理由で電気機器もかご室内に仕込むこととなったのですが狭いスペースに設置するのはとても大変な作業でした。中陣がこう続ける。「昇降路が屋外ですのでメンテナンスの作業性を高めることも重要なミッションでした。エアコンの試作品を実物大で製作し、羽根田さんとともに電磁波の試験に立ち会ったのはいい思い出です。」



超高層、屋外、電磁波——さまざまな課題をクリアした、「チーム三菱」の総合力。

90カ国を超える国々で稼働する三菱電機のエレベーター。その卓越した安全性・信頼性が評価され、世界屈指の超高層ビルや著名な建築物に採用されている。そんな三菱電機でさえも、前例のないプロジェクトとなった東京タワーの屋外展望用エレベーターの改修工事。その開発の舞台裏を、4人のキーマンに聞く。

開発陣の前に立ちほだかる 現行法規という名の高い壁

お客様との窓口を務めた村越が言うように、東京タワーの屋外展望用エレベーターの開発は文字通り「屋外」に設置されることが最大のネックとなった。巻上機の開発を担当した浅野は、その苦勞をこのように語る。「これまでも東京タワーのエレベーターは屋外にありましたが、今回のリニューアルにおいては戸開走行保護装置(UCMP)をはじめとするエレベーターの安全性に関する現行法規に対応する必要があります。UCMPの要求事項を満たすには、ロープが濡れた状態でも適切なトラクションがかかること。そして、ブレーキの制動面に結露や錆が発生した状態でもかごの制動距離が基準値内であることが求められます。幸いトラクションについては問題がなかったのですが、制動距離に関してはたとえカバーで覆って雨の侵入を防いでも結露で濡れてしまふ。そこで、排水用の溝を設けたブレーキパッドを新たに開発しました。こうして屋外環境でも十分な制動力を確保することで、三菱電機にとって初めての「屋外エレベーター」の開発がスタートした。

部、課、グループをまたぐ 画期的なプロジェクトに

デザイン研究所、鎌倉製作所といった三菱電機グループ、さらには設計事務所やゼネコンとの連携により成し得た今回のプロジェクト。機械設計を担当した山下も、そのシームレスな取り組みは前例がなかったと語る。「たとえば、私のようにフレームやレールなどを扱う「機械屋」と、中陣さんのような「電気屋」、羽根田さんのような「意匠屋」は、通常であれば計画書のやり取りだけで膝を突き合わせて仕事を進めるといことはありません。ところが今回の開発に関しては、機械も電気も意匠もすべてが特殊品であり、お互いのフォーローが不可欠でした。こうした部や課、グループをまたいだプロジェクトは自分にとって前例のないものであり、関わったすべてのスタッフにとって非常に新鮮なものでした。これを機にさらに底上げされた「三菱の総合力」を、今後も鉄塔や橋梁の工事に活かしていきたいと考えています。」

*国土交通大臣の認定を受けた安全システム。2009年に建築基準法が改正され戸開走行保護装置(UCMP)の導入が新設エレベーターに義務付けられた。



屋外の厳しい環境下で、安全性を確保するために。

三菱電機(株) 開発部 巻上機開発課 専任 浅野 和雄



より高い電界強度を求め、製作所の垣根を超えて。

三菱電機エンジニアリング(株) 稲沢事業所 電気システム技術部 国内電気設計課 中陣 大貴

日本電波塔株式会社様 User's Voice

東京タワーからの展望風景を満喫できる、素晴らしいエレベーターになりました。

展望用エレベーターのリニューアルにおいて私どもが最も重視したのは、安全性の確保です。老朽化した巻上機・レール・かご等を交換し、管制制御システムも一新するとともに、昇降路においても現行法規に準拠した非常救出階を設置。さらには、機械室も再整備していただきました。また、これまでの特別展望台は250mという単に高い位置にある展望台であったのに対し、リニューアル後の「トップデッキ」はフットタウンロビーから始まる一連のツアーのクライマックスとして位置づけられました。そのため、展望用エレベーターは単なる移動手段ではなく、アトラクションタワーの重要な要素としての役割を担っています。このため、かご室についてはエンターテインメント性を重視した仕様にしたことお伝えしました。

演出面については弊社からの要望も多くの困難な点もあったかと思いますが、東京タワーの特性をよくご理解いただき、また設計会社やゼネコンと協力されて、非常に綿密かつ配慮が行き届いたお仕事をさせていただきました。結果、大きく開いたガラス窓から展望風景を満喫できる、東京タワーならではの非常にユニークなエレベーターになったと思います。また、新しくなったインジケータや表示モニターも、より洗練された印象を与えていると感じます。

著名アーティストによるミラリスインスタレーションをベースに、音楽、照明演出、ガイド端末による展望案内等により感動を提供する「トップデッキツアー」は、開始以来おかげさまで大好評を博しています。今後も東京タワーという観光施設にふさわしいアトラクション的な要素を追求していきたいと考えておりますので、三菱電機さんには我々には想像し得ないような、世間をアッと驚かせるアイデアをご提案いただけたいと思います。

日本電波塔株式会社 不動産本部 施設管理部 斉藤 日出晴様

そして、これからもこれまで通り、お客様へ安心・安全を約束する日々の行き届いた保守メンテナンスをよろしく願っています。

メンテナンスの裏側に迫るエレベーター保守作業シアター

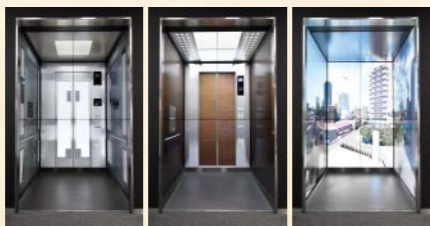
「エレベーターのメンテナンスは、どのように行うの
だろう」——その疑問に答えてくれるのが、こちらの
コーナー。ガラス張りの昇降路に映し出される映像
は、普段見ることのできないエレベーターの機器や
メンテナンスの風景。「メンテナンスに携わる技術者
が、普段どのように作業し、どのように安全を支えて
いるのかを知ってほしい」。その想いが強く反映され
たコーナーです。



エレベーターの構造を
学ぶ意味でも画期的なコーナー

天井と壁全面がモニターで覆われたエレベータービジョン

かご室の壁と天井の画像を瞬時に切り替えることで、リニューアル前後の意
匠をシミュレーションできるエレベータービジョン。この設備には、ご来館の
お客様に楽しんでいただくために、「超高速エレベーター疑似体験」ができる
コンテンツも搭載してお
り、M's station周辺の
リアルな街並みの映像と
ともに体感することがで
きます。取材班も、思わず
仕事を忘れて感動!



まるで実際に上昇しているかの
ような臨場感は圧巻!

安心を実感! ELE FIRST-i

最新のメンテナンスメニュー
"ELE FIRST-i"のコーナー。
閉じ込め故障が発生した際に
情報センターへ自動通報し、
オペレーターがエレベーター
内の状況をインターホンとカ
メラで確認しながらエレベーターを遠隔操作して利用者を救出
する「遠隔閉じ込め救出」など、多彩な機能を紹介しています。



新旧制御盤・巻上機コーナー

このコーナーではリニュー
アル前後の新旧の制御盤や
巻上機を展示してあるだけ
でなく、エレベーターの起動
から停止までの揺れの大き
さを比較し、性能の違いを紹
介しています。その差は、想
像以上でした。



今回は私たちが
ご案内させていただきます!



高橋 誰もが当たり前のように利用している昇降機。そのメンテナンスがどのように
行われているかを知っている人はごく僅かです。そんな、普段は目にするこ
のメンテナンスの裏側を、実際に見て・触れて・実感していただきたいという
想いで、今回M's stationをリニューアルしました。また、フロア内の展示物
を通じて、三菱の技術力と、安全に対する意識の高さも感じていただけたら
幸いです。

篠崎 新しいM's stationは、私ども三菱電機ビルテクノサービスのビル設備
に関する様々なサービスを丸ごと体験できるショールームとなっております。
昇降機のメンテナンスやリニューアルについてわかりやすくご説明いたしま
すので、ぜひ当社の担当者にご連絡のうえご来場いただけたらと思いま
す。みなさまからの
ご見学のお申し込みを心よりお待ちしております。

リニューアル間もないM's stationにお邪魔した今回の取材。最も強く感じたのは、同社のメンテナンスに対する熱い魂
です。一般の利用者はもちろん、ビルオーナーですら普段あまり目にするこ
のメンテナンスの裏側。そんな
目に見えない部分にこそ人・技術を投入し、安全に責任を持つ姿勢を垣間見ることができました。高橋さんの「三菱の品質を
実感していただきたい」という願いは、必ずや来場された方に届くことでしょう。

取材を終えて

ele取材班がゆく!

三菱電機ビルテクノサービス / M's station

知られざる昇降機のメンテナンスを 見て・触れて・実感してみよう!

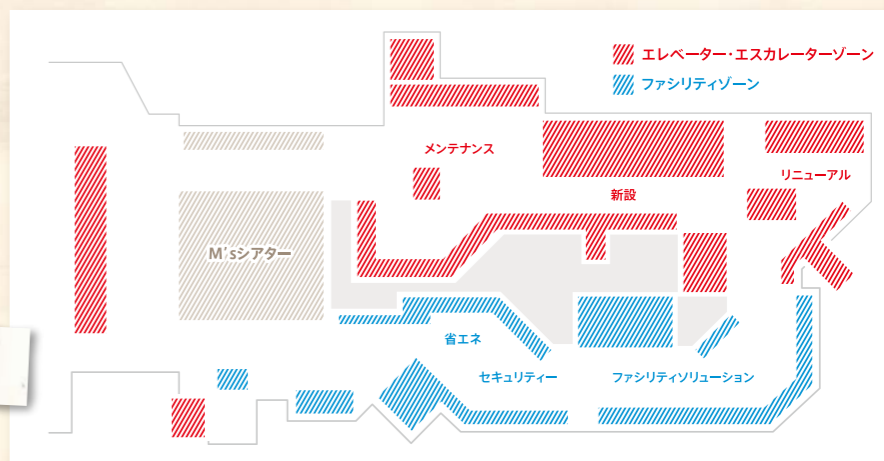


2018年6月、三菱電機ビルテクノサービスの「M's station」
が装い新たに生まれ変わりました。コンセプトは“見て・触れて・
実感できる”ショールーム。普段は見ることのできない昇降機のメン
テナンスの裏側や、リニューアル後のイメージまでを五感を通
じて知ることができます。この新しいM's stationの見どころを
ご案内いただくとともに、リニューアルに込めた想いを昇降機保
守事業本部の高橋 穂さん、篠崎 敦子さんに伺いました。

三菱電機ビルテクノサービス「M's station」
〒116-0002 東京都荒川区荒川7-19-1 (システムプラザ)
連絡先: 03-3802-9915 **EMズテーション** 検索
ご来館をご希望の際は、最寄りの営業窓口にご連絡ください。

生まれ変わった M's station の全体像

M'sシアターを分岐点とし、エレ
ベーター・エスカレーターゾーン
とファシリティゾーンに分かれた
M's stationのフロア。
今回はエレベーター・エスカレー
ターゾーンにフォーカスして取材
を行いました。



今回はファシリティゾーンを
じっくりとご紹介します!

必見! メンテナンスプレゼンテーション

取材班が最も感銘を受けたのが、このメンテナンスプレゼンテーション。ここ
にはエレベーター・エスカレーターに使われるさまざまな部品の新品と劣化
品のサンプルが展示されており「なぜメンテナンスが必要なのか」をわかり
やすく紹介しています。特筆すべきは、ロープの劣化状況をセンサーで検知
する装置。視認が難しい微
細な変化を数値化するこ
とのできるこの装置は、高
精度なメンテナンスをよ
り効率的に行うために開
発したものなのだとか。



三菱の安全へのこだわりを
見て触れて実感できます

圧倒的な臨場感のM'sシアター

大迫力のカーブスクリーンを備えたM'sシアター。三菱電
機ビルテクノサービスの事業や各種商品・サービスを、圧倒
的な臨場感のもとプレゼンテーションします。

